

3. 新潟県の和鏡について

新潟県における和鏡の多くは、耕作中に出土したものや、神宝・寺宝として奉納されているものが多く、発掘調査によって得られた資料は数少ない。このような状況であるから和鏡の詳細な編年作業はおこなわれていない。ここでは県内の和鏡の地名表を作成し、特に長表遺跡出土の和鏡について論じてゆきたい。地名表については整理期間が短く、各地の鏡を全て実見することはできず、各種の文献を利用した。

県内において和鏡（註1）が出土した遺跡、もしくは伝世したものなど文献で知られるものは41遺跡70余面である。これらを遺跡の種別によって分類すると経塚14、塚6、墳墓2、館跡1、川1、寺社の宝物5、遺物包含地6、不明5となる。これらのうち遺物包含地については詳細な調査をおこなえば、性格が判明するものであり、不明なものは、個人所有に係るものや、文献に出土状況などの記述がないものである。一瞥すると経塚・塚・墳墓などに埋納されたものが多いことがわかり、全体の約70%と高い割合を示す。

これら和鏡出土遺跡の分布をみると、中越地方（特に魚沼地方）に分布の密集が認められる。これは前述したように経塚・塚などからの出土が多く、塚の分布は中越地方に多いことが指摘されており（戸根 1979）これらのことと和鏡の分布がたよる一因と考えられる。しかし佐渡地方では1例しか和鏡出土遺跡は認められず、また阿賀野川以北の地（北蒲原・岩船地方）にも希薄な分布を呈していることなどから、これらの地方にも今後の調査によっては追加される可能性もあるがひとつの問題点として指摘されよう。

さて県内出土の和鏡の年代について、鏡のみで年代を決定することはなかなか困難であり、その研究法として、墨書などにより年号が書かれたものや、経塚において伴出した経筒などに記年銘があるものが利用されている。新潟県においては年代のわかるものは以下の5例が挙げられる。もっとも古いものは天神山経塚（青海町）の経筒にある仁安二年（1167年）のもので菊花双鳥鏡・草花文鏡が共伴している。また菖蒲塚古墳経塚（巻町）でも経筒に嘉応二年（1170）年銘があり、草花蝶鳥鏡・山吹飛雀鏡など5面の鏡と青磁・白磁の合子が共伴している。三諦寺経塚（柏崎市）では建仁三年（1203年）銘の経筒があり、梅花双雀鏡・山吹飛雀鏡2面が共伴している。稻田諫訪神社（上越市）では菊花双雀鏡に弘安元年（1278年）11月23日と針書きされ、華報寺（笛神村）では、徳治三年（1308年）銘の骨蔵器と共に伴する例がある。これらから、12世紀後半には確実に経塚などに和鏡が埋納されていたことがうかがえる。これらの和鏡については伝世したものを使用したと思われるものもあるが、全国的な例からほほ、各記年銘の時代に近い時期の所産と考えられている。今後これらの年代観については外容器などとして使用された中世陶器の詳細な編年研究から、これらの和鏡の年代はもっと確実なものとなるであろう。また菖蒲塚古墳経塚例などから経塚への埋納は12世紀後半ころから、華報寺例から墳墓への埋納は14世紀にはおこなわれている。

表2 新潟県内和鏡出土地名表

| No | 遺跡名 | 種別 | 出土地 | 出土遺物 | 文献 |
|----|----------|------|-------------------|--|---|
| 1 | 七ツ塚2号塚 | 塚 | 神林村七ツ塚 | 鏡(Φ9.9cm)、刀子、須恵器片 | 『幣舟』 |
| 2 | うしろ山塚 | 塚 | 神林村蕨岡 | 蓬萊鏡(Φ12.6cm)、木炭片 | 『新潟県遺跡地図』田中真吾氏教示 |
| 3 | 堀切遺跡 | 包含地 | 中条町北成田字河竹島 | 菊花双雀鏡(2面) | 『中条町史』 |
| 4 | 華報寺 | 墳墓 | 並神村出湯華報寺 | 鏡、銅製骨器、銅製仏像 | 徳治三年(1308)銘、『新潟県の文化財』第1集 |
| 5 | 横峯1号経塚 | 経塚 | 安田町寺社字横峯 | 藤花松鶴鏡(Φ11.1cm)、山吹双鳥鏡刀子(Φ10.3cm) | 『横峯経塚群』 |
| 6 | 横峯2号経塚 | 経塚 | 安田町寺社字横峯 | 松噴双雀鏡(Φ10.6cm)、素文鏡(Φ9.3cm)、五筋鏡 | 『横峯経塚群』 |
| 7 | 菖蒲塚古墳経塚 | 経塚 | 巻町竹野町字菖蒲 | 草花蝶鳥鏡(Φ11.9cm)、山吹飛雀鏡(Φ11.3cm)、菊蝶鳥鏡(11.0cm)、秋草蝶鳥鏡(Φ10.3cm)、松鶴小鏡(5.0cm)、青銅経筒、青追合子、白磁小壺 | 共伴経筒に嘉定(1170)年銘あり、『新潟県の文化財』、『史蹟天然記念物調査報告書第1集』 |
| 8 | 興業古墓 | 墳墓 | 巻町松野尾字代雨池 | 鏡1、鍵1、古鏡(詳細不明) | 『新潟県遺跡地図』 |
| 9 | 青海神社経塚 | 経塚 | 加茂市加茂字宮山 | 鏡、銅製経筒、刀子1、須恵器(亮) | 『加茂文民俗資料館、資料の手引No2』 |
| 10 | 要害山城 | ? | 加茂市字宮山 | 鏡(詳細不明) | 『同上』 |
| 11 | 貝喰遺跡 | 包含地 | 柴町貝喰新田 | 瑞花八棱鏡(Φ8.7cm) | 戸根与八郎氏教示 |
| 12 | 小栗山経塚 | 経塚 | 見附市小栗山町七所山 | 山吹蝶鳥鏡(Φ10.9cm)、古鏡、太刀、刀子、経軸頭、須恵器片 | 『小栗山経塚調査報告書』 |
| 13 | 三諦寺経塚 | 経塚 | 柏崎市新道5963 | 梅花双雀鏡(Φ9.57cm)、山吹飛雀鏡2面(Φ9.24cm、9.24cm)、銅製経筒、壺、紙本法華経 | 経筒、建仁三年(1203)銘あり、『柏崎市の文化財』ほか |
| 14 | 五十嵐家蔵品 | ? | (柏崎市本条192) | 曲水菊花双雀鏡 | 『柏崎市の文化財』 |
| 15 | 円福寺蔵品 | ? | (寺泊町上荒町円福寺) | 瑞花双鳥八棱鏡 | 『新潟県遺跡地図』 |
| 16 | 蓮花寺蔵品 | ? | (三島町蓮花寺) | 鏡(詳細不明) | 『新潟県遺跡地図』 |
| 17 | 氣比神社蔵品 | ? | (三島町氣比神社) | 鏡(詳細不明) | 『新潟県遺跡地図』 |
| 18 | 川治10号塚 | 塚 | 十日町市川治字城ノ古 | 梅樹双雀鏡(Φ11.0cm) | 『県理文調査報告』第2 |
| 19 | 船坂遺跡 | 包含地 | 十日町市乙字坂ノ下410 | 菊花鏡(Φ7.6)蓬萊鏡(Φ12.0cm) | 『つまり』9号 |
| 20 | 押付小牧社遺跡 | 木の空洞 | 津南町大字外丸丁(押付小牧社境内) | 蓬萊双雀鏡(Φ10.5cm) | 『津南町史』資料編(上巻) |
| 21 | 七社ノ宮遺跡 | ? | 津南町上郷宮野原字七社ノ宮5702 | 菊花双雀鏡(Φ11.0cm)、蓬萊鏡(Φ11.2cm) | 針穴あり奉納、『津南町史』資料編(上巻) |
| 22 | 天狗じ遺跡 | ? | 津南町上郷宮野原字天狗山5329 | 無圓索紐松柳鏡(Φ8.0cm)、重圓蓬萊鏡(Φ12.0cm) | 『津南町史』資料編(上巻) |
| 23 | 結東の塚 | 墳墓 | 津南町大赤沢 | 鏡(詳細不明) | |
| 24 | 長表遺跡 | 川 | 六日町小栗山字北沖 | 梅枝蝶双雀鏡(Φ10.5cm) | 松永清夫氏教示 |
| 25 | 西山の塚 | 塚 | 六日町大月字西山 | 菊丸文散双雀鏡(Φ10.8cm) | 『新潟県遺跡地図』 |
| 26 | 三日月経塚 | 経塚 | 六日町坂戸字薬師 | 鏡(詳細不明) | 経筒に「守真安」の墨書き銘あり |
| 27 | 大御堂2号経塚 | 経塚 | 塙沢町宮野下字久根添 | 山吹双雀鏡(Φ11.1cm)経筒、四耳壺 | 高田市文化財調査報告第5集 |
| 28 | 中正善寺1号経塚 | 経塚 | 上越市中正善寺 | 鏡、中世陶器、扇、灰 | 『同上』 |
| 29 | 中正善寺2号経塚 | 経塚 | 上越市中正善寺 | 千鳥菖蒲文鏡(Φ9.6cm)、中世陶器片 | 『同上』 |
| 30 | 中正善寺5号経塚 | 経塚 | 上越市中正善寺 | 双鶴菊花散文鏡(Φ8.6cm) | 平野團三『佐越研究』第35集 |
| 31 | 北塚 | 塚 | 上越市五智4丁目 | 鏡18面、古鏡、鍵1、鏡1、刀子2 | 弘安元年(1278)針書き銘あり、『新潟県の文化財』第1集 |
| 32 | 福田源訪神社 | ? | 上越市西松野木字一番割 | 菊花双雀鏡(Φ11.2cm) | 『高田市文化財調査報告書』第5集 |
| 33 | 称念寺 | ? | 上越市寺町2丁目 | 双鶴花八棱鏡(Φ23.0cm) | 『直江津の歴史』 |
| 34 | 飯綱山 | ? | (上越市郷津明静院蔵) | 萩相鳥文鏡(Φ5.0cm) | 『浦川原村史』 |
| 35 | 倉下経塚 | 経塚 | 浦川原村倉下(熊野神社) | 鏡(3面)、刀子2・銅製片口 | (現地説明会資料) |
| 36 | 坪ノ内館跡 | 館跡 | 新井市長森字堂の浦 | 牡丹丸文散双雀鏡(Φ10.7cm) | 『能生町白山神社の宝物』 |
| 37 | 白山神社 | ? | (能生町白山神社) | 鏡(Φ11.0cm)、八棱鏡(Φ8.5cm) | 仁安2年(1167)銘、『青海町一新生へのあゆみ』 |
| 38 | 天神山経塚 | 経塚 | 青海町青海 | 菊花双鳥鏡(Φ11.0cm)、蓮花文鏡(Φ9.7cm)、不明鏡(Φ11.0cm)、経筒、中世陶器(外筒) | 『同上』 |
| 39 | 伊藤家蔵品 | ? | (青海町外波) | 山吹双雀鏡(Φ11.0cm) | 『新潟県遺跡地図』 |
| 40 | 下山墳墓 | 墳墓 | 村上市天神岡 | 洲浜梅樹双雀鏡(Φ13.6cm)、中世陶器 | 『佐渡博物館研究報告』第4集 |
| 41 | 三宮貝塚 | ? | 畠野町三宮、三宮神社 | 素文四稜鏡(Φ8.4cm) | () 内は保管場所を示す |

和鏡については中野政樹は実用品としての機能の他に信仰の機能として以下の7点をあげている（中野 1969）。まず第1として、神靈を表徴するのに最もふさわしい鏡といえる御靈代として神社等に祀られるもの、第2として神の調度品である御神宝として神に献じられるもの。第3として鏡面に神仏の姿を線彫または墨画で表わし、神像として礼拝したもの。第4として、神像と同様な性格で仏像の胎内に納められ、仏の本体としたもの。第5として、経塚に埋納されたもので、この場合は鏡は刀剣などと共に納められたものと、経筒の側に埋納するのではなく、経筒の蓋や底板として使用されたものの2種がある。前者は奈良時代における鎮壇具や舍利収蔵と同じく除魔の意味で用いられたものと考えられる。また後者は単に蓋など鏡の再利用したものではなく、経巻を仏教から護持するという意味を強く意識していると考えられている。また第6として、海や湖沼に鏡を投げ入れる習わしである。これは海の場合においては交通上の安全の祈願などの意味もある。また湖沼に投入する鏡の場合、湖沼の水面と鏡面が同様であることからこれらの鏡奉納がなされたと考えられる。第7として、神に祈願するときに奉賽のためこれを奉納したもので、奉納祈願の趣意を書いたものがあり、孔をあけてつるしたものなどが多く認められる。

以上が鏡に関する信仰の全容であるが、新潟県内で確認されている鏡についてみると、多くは経塚・塚などへの埋納であり、北塚（上越市）のように数回に及ぶ埋納例も認められる。また大御堂経塚（塩沢町）のように経筒の蓋として使用されたものもある。また小牧社（津南町）のように奉納の為にかけてあったものなども存在する。中野分類による鏡信仰の1、2、5、7などが主に県内においておこなわれたものと思われる。また6にあげた池・沼などに投入された鏡の例は確たるもののは認められていない。

このような状況の中で、長表遺跡では、川と考えられる溝上面から出土しており、他の県内の和鏡出土状況とは異なっている。溝からの出土の場合、廃棄されたものか、もしくは災害など不可抗力によって川などに流されたものか、信仰の対象として投げ込まれたものか3通りの可能性が考えられる。現在までのところ、長表遺跡の例が3種の可能性のうちどれにあたるか詳細に考えてみると、まず第1の廃棄の場合、本遺跡例のものは、鏡背面から打たれて凹んだキズが2ヶ所あるが、鏡面はなめらかで、わずかに鋸があるのみで、破損による廃棄とは考えられない。また第2の自然の洪水等については川の中に自然遺物である流木等は認められるが、家の部材などはなく、洪水等が発生したことは確認できず、根拠は薄いものと思われる。また信仰上の遺物としては、山形県羽黒山のように信仰の対象物は長表遺跡周辺には認められず、また大きな沼や池なども存在しない。近くに修驗道の山である八海山があるのみであり、信仰に直接結びつける論拠は薄いと思われる。しかし、単に溝（川と考えられる）から鏡が出土したというのではなく何らかの精神的作用が働いた結果、川に鏡が投げ込まれたのではないかという疑問がわいてくる（註2）。現状では不明な点が多く、結論は導き出せないが、今後この種の和鏡の出土状況について注意をはらう必要があるものと思われる。

註1 ここでいう和鏡とは、古墳時代や奈良期から平安時代前半の彷製鏡とは区別し、平安時代後期から近世にかけてのものをさす。なお柄鏡などもあるが、ここでは円鏡・八稜鏡をあつかうこととした。新潟県内和鏡出土土地名表については文献であつめられるものについては文献とともに掲載した。各鏡の文様名については該当文献に使用されている名称を載せた。

註2 八海山に関する信仰については鈴木昭英(鈴木 1978)の詳細な論文がある。それによると古代・中世の信仰については不明であるが、南北朝期に著わされた安居作の『神道集』に弥彦・米山について越後三の宮として八海大明神をあげてあり、信仰されていた可能性がある。近世前半ころは忘れられていたが、近世後半から末には盛んとなり、里宮も多く作られた。このころ山姿を望見できる里地で遙拝し、祭祀してきたものと考えられている。このように八海山に山神が鎮守しているという観念は古くからあったと思われる。

4. ま と め

本遺跡は魚野川の左岸の複合扇状地に立地している。今回の調査では遺構と呼ばれるものは畝状遺構と土壙の他ピット群があるにすぎなかった。当初大型溝状遺構と考えていたものは自然の河川跡と判明した。遺構そのものについては地形の改変が比較的古くから大規模に行われていたため、遺存状況は極めて悪かった。このため、遺跡全体の構造や性格を明確にすることはできなかった。遺物は縄文時代早期から近世まで、ない時代のものはないが、大半の遺物は自然の河川跡から出土している。遺物そのものは自然的条件で河川に流入したもので、人為的に投棄したとは考えられない。このために、遺物の資料的価値は劣るもの、県内の考古学的研究に寄与する点は数多くあるものと思われる。

注目される遺物は縄文時代早期の押型文土器と弥生時代中期の土器である。押型文土器は南魚沼地方で最初のもので、早期の県内の該期の文化を考える上で必要欠くべからざる資料となる。弥生時代中期後半の土器は信濃の千曲川流域に分布する栗林式土器で、今まででは信濃川流域の十日町市所在の牛ヶ首遺跡出土の土器が最下流であった(塙沢 1977)。本遺跡出土の土器によって、その分布は魚沼丘陵を越えた魚野川流域にもその文化の影響が明確にあることが判明し、塙沢町大江作遺跡とともに魚野川流域も信濃川流域と同様、信濃の千曲川水系の弥生文化の中に包括されていたことが判明した。伴出遺物が数少なく、当時の社会生活などを明確に把握されないが、魚野川の沖積地に根をおろした人間が弥生時代中期末に存在し、該期の生活跡が発見される可能性は極めて強い。今回の調査地域内にも弥生時代の土壙が1基確認されている所から弥生時代の遺跡の主体部が必ず本遺跡の周辺に存在することは確実である。また、本遺跡出土の土器と同時期の遺物が出土した塙沢町大江作遺跡の存在や、実態が不明であるが後期の遺跡と考えられている六日町八幡遺跡などの存在から、魚野川流域の沖積地には弥生時代の遺跡はもちろんのこと、古墳時代の生活跡もかなり埋没していると考えられ、今後の調査・研究に期待したい。